

# 企画 部会

## 〜ご命日に聞くと〜

### ご命日は決して 悲しみばかりではないんだ

私の友人、N子さんは48歳という若さで亡くなりました。今回、このような機会を頂けたことで御住職（N子さんの夫）と当時を振り返ることが出来、懐かしさと寂しさでいっぱいになりました。

2010年5月2日、息を引き取られた直後だったと思います。御住職から連絡を頂き病院に駆け付けました。エレベーターを降りてすぐN子さんのお父様が「杉浦さん、N子やっつと諦めてくれました」と。その現実は大変悲しい事ですが、既に受け入れる準備が整っていたかのような、穏やかなお顔で迎えてくれたのを今でもはっきりと覚えています。まだ温かいN子さんの手を握りながら、この7年間はN子さんだけではなく、ご家族にとっても長い闘病生活だった事を目の当たりにした瞬間で

もありました。

御住職によると2002年に病気がわかり治療が始まったとの事でした。私がお見舞いに伺ったその時は化学療法の中でした。病室のカーテンを開けた途端「帰って！もう来ないで！」と。私はその言葉にショックを受けましたが、その頃の様子を御住職は「あの頃は、本人にとって一番辛く大変な時だった」と話され、重ねて「亡くなる年の2月だったかな：担当医からそう長くは生きられない」と二人揃って聞かされた事も教えてくれました。

亡くなる前の年の10月、N子さんは私に今後の目標を話してくれました。私は月に2回電話をする約束をしました。電話の内容は、高校受験を控えたお嬢さんの事ばかりでした。しかし、その頃のN子さんの体調はあまり良くなり、

受験まで体がもつかなと御住職は心配していたそうです。でもN子さんは「受験当日は見送りたい」という願いを果たし「お弁当作って持たせたよ」と私に知らせてくれました。その後「卒業式に出席したい」「合格発表見届けたい」

そして、「高校の入学式にも出席したい」と話し、見事その全てを実現させたのです。入学式当日、私に届いたメールには写真が添えてあり、そこには笑顔のN子さんとお嬢さんの姿がありました。その時の私の心境を御住職に伝えると、少し辛そうなお顔で3月末に家族で温泉に一泊した事や4月23日、残念ながら入院になってしまった事など話してくださいました。4月24日、御住職より入院の知らせを受け、一日おきに病室を訪ねました。この状態でお嬢さんのお弁当を作り続けたのかと思うと、N子さんは「一回でも多くお弁当を作りたい」と願い、身体に残された力はなくても、諦めなかったのだと感じました。

御住職に「ご命日」という言葉から何を思いますか？と尋ねました。すると「今生きていたら56歳、真面目過ぎるぐらい真面目な人で、おかしいと思ったら許せない性格で：」続けて御住職が「ご命日の話は、寂しい気持ちになるばかりではなく楽しく笑える事も思

い出される。決して悲しみばかりではないんだ：」と言われました。

5月2日は「もっと生きたい」と願い続けたN子さんのご命日です。ご命日はお別れの日でもありますが、N子さんのありのままの一週間に遇わせて頂いた事を思い出せば：なぜか新たな出会いを感じます。それは忘れられない出来事から、その時の思いとは異なる感情が湧き上がってくるからです。そして今でも、N子さんのお父様がおっしゃられた「やっつと、諦めてくれました」この言葉を度々思い出します。もうお父様はお亡くなりになり、この時の胸の内をお聞きすることは出来ませんが、この一言は、今でも答えを記せない問題となって私の胸の中に残っています。

N子さんの葬儀で私が述べた弔辞の最初の言葉は「N子さん、私は悲しいです」でした。今もその気持ちは変わりませんが、N子さんのご命日は楽しい思い出ばかりが蘇ってきます。息も荒く意識が朦朧としている中、病室でN子さんが私にかけてくれた最後の言葉が「ビール飲もう！一緒に帰ろう！」でした。あまりにもN子さんらしくて、思わず笑ってしまうご命日に遇わせて頂いています。

（文責 杉浦美佳）